

第49号 50円
昭和52年7月25日

内容

D・デフォー氏よりのメッセージ…1
 川喜田愛郎氏、理事長に就任…2
 第35回理事会・第21回評議員会…2
 試験研究法人に指定さる…2
 千人会報告…3
 第90回・第91回共同セミナー…4~6
 NHK放送=人生読本…7~8
 事業部だより…9
 館長日記から…11
 利用状況…11~12

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行
 財団法人 大学セミナー・ハウス
 <所在地>
 東京都八王子市下柚木
 (☎192-03)
 電話 0426-76-8511~3
 振替口座 東京 74590番
 <東京事務所>
 東京都中央区日本橋本町3-3
 三井銀行本町支店ビル5階
 電話 東京 (241) 3961
 編集・発行人 飯田宗一郎
 製作 中央公論事業出版

私は一七三一年のある日、ロンドンのスラム街の薄汚い下宿の一室で、誰にもみとられることなくただ一人わびしく死んでいった雑文書き、ダニエル・デフォーともうす者です。私の書いた多くの本のひとつ、『ロビンソン・クルーソー』が、世界の人びとに愛読されたばかりか、一つの文学作品としてだけではなく、社会科学研究の話題としてまで取りざたされているのを見て、嬉しいやら、少しくすぐったいやらの気持ちでした。知らない遠い極東の島国で、大学セミナー・ハウスという教師と学生が集う学問の広場に、学界の第一人者と熱心な学生が大勢一堂に会して、この架空の人物についてのセミナーを開いてくれたのは、正直いってたまげてしまいました。

しかし、天国からその進行のすべてを拝見しているうちに、驚きはさらに高まり、喜び、いやむしる感謝に変わってきました。参加者の一人、ユイケ某の夢枕に立って、いわば彼を霊媒に使って、私の気持ちを彼のペンで書かせることになりました。

まず第一に感心したのは、参加の学生たちの熱意、それから、私の本に対する読みの深さ、鋭さです。一日のスケジュールが終わった後、講師の先生たちが一室に集って、翌日の打ちあわせその他いろいろについて、真夜中ごろまであ

れこれ論じ合っていました。その時に出た話題は、私がおも生きていたら、一冊の本にして出版したいくらい、面白くまた豊富なものでした。ここに紹介できないのが残念なくらいです。ところが、その時に出た話題とまったく同じ話題が、次の日の朝セミナー室の一つで学生から出されたのです。その学生の名誉のためにおことわりしておきますが、もちろんウォーターゲイト流の盗聴なんかあったわけではありませんよ。学生の読



ダニエル・デフォー氏

よりのメッセージ

東京都立大学助教授

小池 滋

みの深さが、先生のそれに決してひけをとっていなかったことが、証明されただけなのです。

私の第二の感心は、ロビンソンの生みの親たる私にすら思いもよらなかつた多くの視点から、この人物を取り上げるといふ、そのアプローチの多様さ、豊かさです。そして何よりも私にとって嬉しいか

つたのは、せっかちに一つの結論に到達しようとはせずに、論議の過程を大切にしようとする、このセミナー全体の基本的姿勢でありました。二日半のセミナーによって、新しく目を開かれ、新鮮なシ

ョックを受けたのは、学生だけではなく、先生もそうであったようです。一人一人がその収獲を家に持って帰って、さらに深く考え、じっくり大事に育てようとして下さるわけです。ここでもかかれた種が芽を出し、花を咲かせ、実をつけるまでには、この先何年もかかるかもしれません。しかし、作品『ロビンソン・クルーソー』が書かれて以来、今日まで絶えずに持っていた二百五十年あまりの生命に比べたら、ほんの僅かな時間ではありませんか。目新しいこと、

気のきいたことを言って、大方向の受けをねらった結果、一時は評判になっても、すぐに忘れられてしまふデフォー論が、これまでたくさんあったことを考えると、あわてて結論を求めず、腰をすえてゆつくり考える研究の方が、はるかに私を満足させてくれることでしょう。

最後に、「ロビンソン・クルーソーと現代」というテーマの設定に感心しました。この点で私は、セミナーの発案者の方に深い感謝と敬意を捧げたい気持ちです。なぜなら、私にとって『ロビンソン・

クルーソー』とは、一七一九年という、まさに「現代」の書だったのでから。そして一七一九年のイギリスの読者だけではなく、それぞれの時代のさまざまな国の読者が、自分たちの「現代」の書として読んでくれたのですから。というわけで、今度のセミナーに出席して下さった皆さんにもぜひお願いしたいのでありますが、この本をいつも皆さん方自身の生きる時代、つまり「現代」の書としてとり上げて下さい。その結果、さまざまな不満を感じることもあるでしょう。それは当然のことですから、私は少しも腹は立てませんが、もし誰かが、「現代のわれわれには多くの不満が残るが、十八世紀の当時の読者にはこれで充分だったのだから、まあよからう」というような、一見寛大で思いやりがありそうですが、実は大それた思いあがった態度をとった場合には、私は猛烈に腹を立てることでしょう。そして、「君は一九七七年が一九一九年よりずっと優れた時代だと、本気で思っているのかね。自分がそんなに進歩した人間だと、うぬぼれているのかね」と反問してやりたくなるでしょう。でも、これはあのセミナーに出席した方には、いままら説法するまでもないでしょうね。

では、またいつかお会いしましょう。お元気で。

(第91回大学共同セミナー「ロビンソン・クルーソーと現代」指導教授)

川喜田愛郎氏が理事長に就任

故正田建次郎氏の後任として

昭和52年6月9日理事会決定



「専門職と国民の生活―医師」
第46回共同セミナー指導教授
「科学文明はどこへ行く」

第35回理事会 第21回評議員会

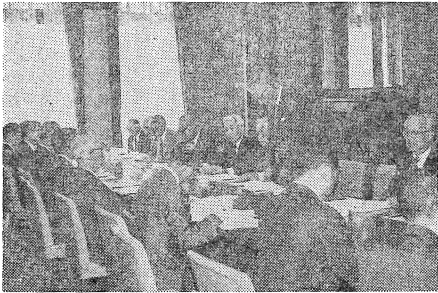
正田理事長が昭和52年3月20日急逝され、その空席をいかにしてうずめるか、理事会はしばらくその人選に時を過した。開館して十二年目を迎えるまでに交わりを結んだ学者の数は多い。当セミナー・ハウスの間に生まれた相互の信頼と尊敬を背景にして、何人かの候補者が長老先輩の間から推挙された。その結果、元千葉大学長・同大学名誉教授川喜田愛郎医学博士の就任を見るに至った。

昭和51年度事業報告・決算報告
昭和52年度事業計画・収支予算
評議員・理事の補欠人事
後任理事長の選出
昭和52年6月9日・銀行クラブ

〔出席者〕

顧問 山内恭彦、増田四郎、加藤六美、森戸辰男
理事 茅誠司、中村哲、林健太郎、勝木保次、福原満洲雄、沼田

次に当セミナー・ハウスと新理事長との関係を略記し、学者として、また協力者としての片鱗を紹介したい。
。維持後援会・千人会の会員
。開館五周年記念講演 「現代の学問的状况―医学を例にして」
。第36回共同セミナー指導教授



理事会・評議員会議事風景

稲次郎、小山五郎(代)、飯田宗一郎、海老沢義道
評議員 川原栄峰、鈴木皇、内藤正、板垣與一、村山松雄、平島正喜、坂本是忠、岡茂男、小谷正雄、渡辺輝雄、相良惟一、藤井正一、鈴木隆雄、岡本素光(代)

◇

中村哲氏が議長席につき、開会。議案は館長より説明、すべて可決承認された。後任理事長については別記の通りであるが、理事、評議員として推薦され、新たに補欠された役員は次の通りである。

◇新たに理事に嘱任された者
前文部大臣 永井 道雄氏
千葉大名誉教授 川喜田愛郎氏
慶応義塾長 石川 忠雄氏
明治大学総長 麻生平八郎氏
◇新たに評議員に委嘱された者
鶴見大学長 三輪 全龍氏
三菱商事社長 田部文一郎氏
ブリヂストンタイヤ会長
東京電力社長 石橋幹一郎氏
平岩 外四氏

●半ばを越した

開館十周年記念の募金運動は、次第に成績をあげ、6月10日現在の申込確定額は約一億二、〇〇〇万円に達した。

大蔵省は、去る4月28日付で、この寄付金募集の指定期間をさらに一カ年延長することを認可し、この旨を告示した(大蔵省告示第

46号)。

今年の春から秋にかけて、当ハウスは、国際交流オリエンテーションセンターと交友館の建築を行うことになる。この建物が完成すれば、新しい国際活動が開始されるから、事業部は国際学生セミナーなどの国際プログラムの作成に野心的に取り組んでいる。

寄付金 試験研究法人に 指定さる

大学セミナー・ハウス十一年の歴史と実績は、各方面から注目され評価されているが、その一つの表われとして、本紙第47号に一部既報のとおり、セミナー・ハウスを「試験研究法人」とすることが正式に決定した。
4月1日付官報(号外第22号)

△開館十周年記念事業寄付金 第二報(52年3~5月)

- | | | | |
|---------|-----------|---------|-------------------|
| 10,000円 | 三菱電機京都製作所 | 5,000円 | 青山学院大学 |
| 10,000円 | 勤務 犬塚 博殿 | 13,000円 | 羽田ゼミナール |
| 10,000円 | 神奈川大学教授 | 10,000円 | 青山学院大学 |
| 10,000円 | 小山吉之助殿 | 10,000円 | 坂井ゼミナール |
| 50,000円 | 神奈川大学長 | 10,000円 | 中央大学教授 |
| 6,000円 | 飯田耕作殿 | 5,000円 | 外間 寛殿 |
| 10,000円 | 千葉大学物理化学 | 10,000円 | 柳河精機(株)総務部 |
| 10,000円 | セミナー殿 | 10,000円 | 労務課研修係一同殿 |
| 10,000円 | 三戸ゼミ十五周年 | 10,000円 | 早稲田大学教授 |
| 10,000円 | 記念会殿 | 5,000円 | 本明 寛殿 |
| 10,000円 | 共立女子大学教授 | 10,000円 | 弁護士 原 増司殿 |
| 5,000円 | 手塚富雄殿 | 10,000円 | 高橋法律事務所長 |
| 5,000円 | 学習院大学教授 | 10,000円 | 高橋 誠殿 |
| 5,000円 | 小泉一郎殿 | 10,000円 | 開館当時の奉仕グループ 小嶋泰典殿 |
| 5,000円 | 駒沢大宗教文化研殿 | | |

に「政令」として、所得税法施行令の一部改正が公布されたが、その第二一五条第二号「試験研究法人等の範囲」に、今回新たに次の項目が加えられた。すなわち、
「多数の大学(学校教育法第一条に規定する大学をいう)の教員及び学生の学芸の教授研究に資するための宿泊研修施設の設置運営に関する業務を行うことを主たる目的とする法人のうち、当該業務に関し国から補助金の交付を受け、かつ、その交付を受けた日の翌日から二年を経過していないもの」。

これによって、当セミナー・ハウスが計画する今後の募金は、寄付される会社等が一定の制限内で寄付金の損金扱いを受けることができる。

千人会 会員増加運動 第九報 昭和52年4~5月

現在会員は一、四二七名です

大学人 一、二一八名
社会人 一、三〇九名
(52年5月31日現在)

新しく会員となられた方々

27名 (第38回報告 (申込順))
産業能率短期大学教務部係長 楠 吉彦殿

東京工業大学助教授 熊田慎宣殿

学習院大学教授 富山芳正殿

当ハウス職員 田島澄江殿

当ハウス職員 綿引二郎殿

当ハウス職員 納富照枝殿

八王子追分町郵便局長 大野聖二殿

ニューロング精密工業(株) 取締役 井上 繁殿

取締役 榎レナウン相談役 鈴木達雄殿

終身 (旬本郷計算センター) 取締役 本田 誠殿

東京医科歯科大学非常勤 講師 松平文朗殿

弁護士 中利太郎殿

高橋法律事務所長 高橋 誠殿

榊光文社社長 小保方字三郎殿
福永会計事務所長 福永寿巳夫殿
千野製作所社長 青木清明殿
近藤会計事務所長 近藤 裕殿

A 東京工業大学教授 飯島泰蔵殿
B 利研刃物(株) 取締役 中井虎一殿
C 東京都立大学助教授 磯部 力殿

A 慶応義塾大学教授 高橋潤二郎殿

C 東京薬科大学教授 河野 恵殿

C 東京都立大学教授 米満 澄殿

C 国際基督教大学教授 讃岐和家殿

A 東京工業大学教授 長谷川健介殿

C 相模女子大学助教授 岡安茂祐殿

C 東大52年卒 水谷真智子殿

◇会費ありがとうございました
昭和52年4~5月 (敬称略)

藤永鉄雄、増田武男、本明寛、森田弘久、堀野定雄、渡辺江健郎、北野 久、大野京子、波辺礼子、金子六郎、羽田三郎、榎田信男、加藤六美、久保田浩、都留春夫、村上正夫、藤本紘、桐生富久、古川晴風、柴谷恭次郎、坂本忠、犬塚博、辻清明、岡村繪吾、石井千尋、新見宏、原口隆英、外間寛、安藤賢一、安芸皎一、林武、西山忠範、二宮永蔵、江洲浩美、倉沢進、堤彪、塩田庄兵衛(仁科雄一郎、小原清成、井早康正、下森定、坂原敏房、羽田新、向山文雄、高橋康之、高木健太郎、米川哲夫、矢野洋四郎、豊島広司、藤井弥太郎、横

山定雄、立入広太郎、村山松雄、関根隆光、長里静子、山内二郎、中島直忠、鈴木昭、尾田綾子、館逸雄、佐藤公孝、大槻盛一、小川仁、中島康孝、竹田政民、野々口格三、市川眞一、木村尚三郎、石弘光、古屋健三、村上千賀子、高峯一愚、杉浦明、奥野忠一、土田貞夫、龍池隆、木村建一、小菅東洋、海老根宏、谷口茂、池田和夫、森山俊雄、板垣雄三、井上宇市、清永昭次、山崎誠、下出積興、加藤秀俊、水谷三公、工藤康雄、橋口英俊、勝田有恒、一柳富夫、見目洋子、伊倉退蔵、近藤雅世、吉利喜美、竹内昭夫、天野一夫、楠吉彦、細谷千博、田島澄江、綿引二郎、納富照枝、大野聖二、井上繁、鈴木達雄、中利太郎、本田誠、高橋誠、福永寿巳夫、青木清明、小保方字三郎、近藤裕、田中恵美子、高橋潤二郎、村田閑也、板倉讓治、高橋哲郎、高橋三雄、後藤捨男、堤辰次郎、佐伯彰一、川口弘、金子靖、近藤正夫、荒井 猷、彦由一太、大原栄一、赤根也、西宮輝明、深海博明、木島康彦、矢沢大二、長谷川幸男、木原太郎、正田亘、山下肇、岩崎英二郎、中村英雄、榎山欽四郎、鈴木悌二、大村晴雄、梅沢文輔、久保田静枝、芳賀徹、峰岸純夫、橋本次郎、川添奈津子、加藤一郎、馬場伸也、安藤英治、大原洋司、狩野紀昭、芳山邦弘、阿久津喜弘、今井孝、大塚久雄、山之内靖、内田市五郎、関口忠、中村孝俊、天城勲、芹沢栄、原治、末武国弘、岡田己代次、今井義夫、角田稔、古西信夫、中嶋嶺雄、奥山典生、菅野暁、安藤利亮、高柳雄、児玉昭太郎、鈴木正紀、柴垣和三雄、小池勇二郎、竹村猛、栗田見瑞、島内武彦、朝野洋一、玉真秀雄、刈田元司、高橋忠次郎、岡安茂祐、大籠まり子、迫村純男、川名明、西川大二郎、徳永勇

共同セミナー委員会 正副委員長会議

5月1日/17時半~ /私学会館

昭和52年度の新委員会発足に当たり、51年度の正副委員長の出席を得て、前年度をもって任期を終了した委員の後任人事を議した。

出席者 (敬称略) 岡宏子、宇野重昭、関口晃

寄付金報告

52年5月末現在

一般寄付金 > 青山学院大・原ゼミ殿 二〇〇〇円

慶応義塾大・西川ゼミ殿 四、五〇〇円

大映テレビ(株)殿 六三、〇〇〇円

青山学院大・守永ゼミ殿 三、〇〇〇円

四阿会代表 金山勝子殿

植樹寄付 > 文教大学女子短期 一〇、〇〇〇円

大学部英語英文科 指定寄付金 > 鏡取付のために 一〇、〇〇〇円

計測自動制御学会殿 一、〇〇〇円

柳嶋優子殿 < 館長喜寿祝準備基金 > 一〇、〇〇〇円

元セミナー職員 藤永鉄雄殿 一〇、〇〇〇円

聖心女子大学長 相良惟一殿 一〇、〇〇〇円

東京都立大助教授 中村和郎殿
東京大学教授 西尾 勝殿
東京都立大学教授 関口 晃殿
八、五〇〇円 第90回共同セミナー 参加者一同殿

芝浦工業大学教授 十代田知三殿 三、〇〇〇円

52年3~4月

寄贈図書

「Asian Culture」No. 15

「エネスコ・アジア文化センター」

「佐渡叢書」第7~9巻

「Introduction to structural design in architecture」

「政治経済史学」一、二七~八

「政治経済史学会誌」

「採集と飼育」3~4月号

「社会学論叢」No. 68

「死と向かいあう看護」

「生理学的心理学」

「栄養学20章」

「人間の学としての経営学」

「現代社会の実証的研究」1・2

「東京教育大学社会学研究室の歩み」1・2

「金融経済」一六一

「新版天体観測入門」[新星座早見]

「文化人類学のすすめ」

第90回大学共同セミナー

主題——日本列島——その自然と人間——

期日——昭和52年5月13日～15日

△全体講義▽

水に流す風土——国土科学の一断面

名古屋大学教授 島津康男氏

△セクション演習▽

A 衛星写真から見た日本列島

東京都立大助教授 中村和郎氏

B 日本列島における自然生態系

東京都立大学教授 宝月欣二氏

C 人口と日本列島——今世紀末までの日本人口の変化に対処できるか——

日本大学教授 黒田俊夫氏

D 日本の都市化

慶応義塾大教授 高橋潤二郎氏

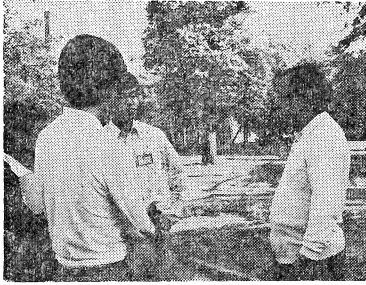
E 日本における国政と地方自治——市民自治の観点——

東京大学教授 西尾 勝氏

△運営委員▽

東京都立大学教授 関口 晃氏

△参加学生▽60名(内女子13名)



島津康男教授と学生たち

を含めると高学年生が全体の83%を占めるといふ、かなり専門的な傾向を示したセミナーとなった。

島津先生は、全体講義で、①「学際的な人間を教育できるか、②「環境の現場監督」のトレーニングとその意味、③日本列島を考える場合の原則(環境学の基本的ワタク組)、の三点にしばって話をされ、国土科学をとりまく諸問題を明らかにされた。

今や絶望的なまでの状況に置かれている日本列島の自然環境を考えていくためには、従来はタブーとされていた価値判断、主観的判断を縦横に入れ込んで将来に対する仮説を作ることが要求されており、このために必要な「学際」研究者の養成にも、独自の哲学が根底にすえられ、諸先生も参加されて行われたシンポジウムにおいても、強い実行力を感じさせるブルドーザー的な先生から独特なロジックが存分に展開された。

しかも「狭い閉じられた日本列島に、自然と人間が生きていくためには、どういうシステムが学びとれるか」、その命題は具体的な事例を通して考えていくということにつきつめられるわけで、最終日の全体集会で「下半身を丈夫に、つまり手と足を使って動く訓練をしてほしい」、「何でもよいから私が見た村、町、山はこうだった」という体験をしてほしい」としめくくられた先生のことばが、参加学生に大きな示唆を与えた。

今回の主題は関口晃教授の提案「公害と環境権」が発端となつて考えられたものである。

岡宏子、野田春彦、江沢洋、山岸健の四氏が加わり準備委員会が作られ、極めて意欲的に構想が練られた結果、われわれ日本人の生存基盤である日本列島に焦点をあて、学際的に環境問題にアプローチしていくという主旨で、テーマを「日本列島——その自然と人間——」と設定した。

セミナーの中核には国土科学という専門分野で独自の理論を展開されている島津康男先生のご出馬を仰ぎ、別記の陣容によるユニークなセミナーが実現した。

今年度第一回でもあり、学生の反応が興味深かったが、年度早々という時期の問題もあって、定員を下廻ったことは大変残念であった。学年別の構成比をみると、大学院生は全体の22%を占め、三、四年

▽共同セミナーに参加して

慶応義塾大学教授
高橋潤二郎



大学共同セミナーは二つの特色をもっている。その一つはinter-universityであり、もう一つはinter-disciplineである。

それぞれの大学はそれなりの「学風」をもっている。また、それぞれの研究分野の専門家は、独自の問題意識、概念図式、技法をもっている。いわば、われわれは、日常の「みえざる枠」の中に生きているのである。大学共同セミナーのねらいは、この「枠」をとりはらうこと、日常性の打破にあるといえよう。

もちろん、われわれは「枠」なだけでは生きてはいられない。大学共同セミナーそれ自身が一つの「枠」であり、いわゆる「学際的」アプローチも単に「枠」をとりはらうことに終るのではなく、むしろ新たな「枠」をつくるところにその真のねらいがあるというべきであろう。

それはともあれ、これら二つの目的のうちで前者すなわちインター・ユニバーシティの方は、今回のセミナーでもかなり成功したように思う。さまざまな大学から集まった若者たちが夜を徹して語りあう、こうした光景はいつみても

感動的であり、いわゆる「人見知り」世代にとっては驚嘆に値する経験であろう。

(だが、こうした経験は一部の人びとにとっては新鮮なおどろきであるかも知れないが、必ずしもおどろきにはあたらない。各地のスキー小屋で、ホステルで、また都会ではミニ・ライブ・スポットでいつでも見られる、むしろありふれた光景だということを認識しておくのはよいことだろう。)

これに対して、もう一つのインター・ディシプリナリーなアプローチの方は、率直にいうと、必ずしも成功したとはいえない。

その理由は、参加した講師の事前の打合せが十分でなかったことと、さらに、セクション演習が個別々に行われ、各講師の考え方が全体に伝わらなかったことである。参加学生は六〇名、たしかにこれはFace to Faceのロミュニケーションには多すぎるが、講義には絶好のサイズである。したがって、セクション演習、全体講義の別にとらわれず、すべての講師が全学生を対象に自己の考え方を述べ、最終的なシンポジウムにもちこめば議論ははるかに活発になったと思われる。

だが、それにしても、システム理論を基礎にユニークな国土科学を提唱されている島津さんの全体講義、それに中村さんの「衛星写真からみた日本列島」は私にとっても大変刺激的であった。

第91回大学共同セミナー

主題——ロビンソン・クルーソーと現代

期日——昭和52年5月27～29日

△全体講義▽

ロビンソン・クルーソー概観

東京大名誉教授 朱牟田夏雄氏

△セクション演習▽

A 『ロビンソン・クルーソー』

は「小説」か？

東京都立大助教 小池 滋氏

B エートス（集団の精神風土）

東京医科大学教授

竹下敬次氏

C 現代における経済学の危機——

ロビンソン・クルーソー的思考の限界——

慶応義塾大学教授 松浦 保氏

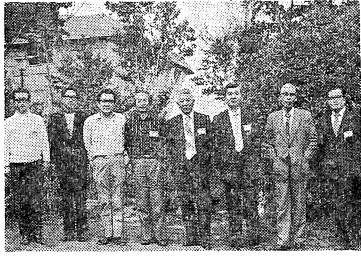
D 自然に生きる——極地生活から

学ぶもの——

第8次南極観測隊長、同越冬隊長

千葉工業大学教授 鳥居鉄也氏

E 文明と未開



右より鳥居、飯田、小池、朱牟田、竹下、松浦、近森、山岸の諸氏

慶応義塾大助教 近森 正氏

△運営委員▽

慶応義塾大学教授 山岸 健氏

△参加学生▽83名（内女子44名）

津田塾大(22)、慶大、早大(各7)、

東大(6)、成蹊大(5)、東外大、上

智大、東女大(各4)、ICU、立大

(各3)、横浜国大、青学大、専修大

(各2)、埼玉大、東工大、都留文科

大、跡見学園女大、国学院大、聖心

女大、中大、日女大、立正大、同志社

女大、青山学院女短大、東洋英和女

短大(各1)、合計25校。

◇ ◇ ◇

一八世紀初頭に創作されたダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』は、これまでも文学の領域だけでなく、哲学、思想、芸術そして社会科学の諸領域でも数多く論じられてきたが、今回のように各学問分野の専門家が一堂に会しての学際的な検討に供されるということは、共同セミナーにとって初めてというばかりでなく、当のクルーソー自身にとって初めてのことであつたらしい。

この異色のセミナーが実現したのは、共同セミナー委員山岸健先生のユニークな着想によるものである。全体講義、ゲスト講演に文学と社会科学の二本の柱を設け、セクション演習には文学、哲学、

経済学、民族学さらに南極での二度にわたる越冬生活を経験された鳥居元越冬隊長を迎えることによつて、「人間と自然、人間と文化、人間と他者」という文脈に潜んでいる一連の「ロビンソン問題」をカバーするにふさわしい第一線の講師陣が配されることになった。ただ一つ残念なことは、予定されていた大塚久雄先生のゲスト講演が先生のご健康上の理由で実現しなかつたことである。そのため、別記のごとく先生のご病気が回復されるのを待って、9月にリニューアルセミナーが企画されている。

あつたらしい新学期間の募集のため定員にこそ充たなかつたが、「テーマを見た」とたん、現在の孤独な自分の問題関心に突きささつた」という学生の声もあり、反響は大きかつた。ジャーナリストもこの独特なテーマを見逃さず、朝日ジャーナル編集部二名の記者が三日間滞在して取材を行った。プログラムの圧巻は二日目に朱牟田先生も交えた指導教授全員によるシンポジウムであつた。それぞれの立場から共通に提示された問題は、資本主義生成期の合理的個人を学問形成の前提に据えることに対する限界の意識であつた。失われたコミュニティあるいは集団的エートスの回復、従来、怠惰の代名詞とされてきた未開社会の捉え直しなどが強調され、近代的個人の典型であるロビンソン・クルーソーは、現代文明批判の書

として解剖されるにいたつた。夕食後のひととき、他の宿泊者にも公開して、鳥居先生のご好意で「越冬日記」など二本のフィルムが上映された。講堂に集つた百数十名の学生たちは、自然の厳しさに圧倒されながらも、自然とともに生きるこの大切さを学び、自然への畏敬の念を深くしたようであつた。

最終日の全体集会では、各セクションの報告と活発な討議が交わされたあと、諸先生から人生や学問についての愛情にみちたはなむけの言葉が語られ、参加者に大きな勇気を与えて異色セミナーの幕は閉じられた。新入生歓迎セミナーでもあつた今回のセミナーは、現代の若者にとつての学際的な思考実験に格好の材料を与えたようである。多摩の丘を下つた現代のロビンソンたちは果して今後どんな生活を刻み、どんなフライデーと出会うことになるであろうか。

▼ロビンソン・クルーソーとの出会い
慶応義塾大学教授 山岸 健

文学作品の登場人物をゲストに迎えたこの異色のセミナーは、今日の人間の存在状況や時代の潮流を考えた場合、当然、企画されねばならないセミナーであつたように思われる。ロビンソン・クルーソー問題は

人間と自然という軸をたどつて考察されるものであるが、この軸の周辺においては、人間と社会、人間と文化・文明といった論点が現われてきたのであり、今回の共同セミナーでは、こうした諸問題をめぐつて多角的な討論が行われ、かなりの成果がみられたことを幸いと思う。今回の共同セミナーが一つの出発点となつて、ロビンソン・クルーソー問題に対して、今後、さらに多角的に徹底した考察がなされることを期待したい。

飯田館長、それに大学セミナー・ハウスのすべての方々、特に、企画室の方々のご協力によつて、この共同セミナーが無事終了したことを感謝したい。日を改めて、大塚久雄先生をお迎へして、再び、この共同セミナーが開かれる日を楽しみに待ちたいと思う。朱牟田夏雄先生の全体講義、各セクション演習を担当された講師の先生方と学生との対話、そのいづれもが、学生諸君にとつて、忘れ得ぬ思い出となつたにちがいない。人間にとつては、日常生活の送り方、日々の生き方が問題となる。ロビンソン・クルーソーの世界を鏡として、その鏡に現代の諸状況が映されたのである。われわれは、われわれ自身と彼との距離を考えてみたいと思う。共同セミナーは終了した。だが、ロビンソン・クルーソーは、今なおセミナー・ハウスに滞在しているように私には思われる。

◇共同セミナーに参加して◇

▼種を育てる

内田 勝

セミナーとは、「種を播く」という言葉に由来していますが、今回「ロビンソン・クルーソー」に遭遇したことによって、私自身に新たな「種」が播かれました。そして三日間の生活を通して、その種の育て方「学問への姿勢」を学びとることが出来たと思います。

の行動様式を前提として、はじめて人間は等質化、原子化され、数学的に操作可能になるのです。しかし、現代社会が提示している環境、社会福祉、教育問題などは、このような数学的操作主義では解決しえなくなっています。それらは、社会的意志決定に関わることであり、共同体における「人間の再考を求めています。他のセクション報告においても、「ロビンソン・クルーソー」の自然支配が現代の問題を引き起こしたのではないか」という指摘がありました。ロビンソン・クルーソーという人間類型にこそ、現代の問題が集約的に投影されるのではないかということを感じました。

「ロビンソン・クルーソーと現代」という題を目にした時、この企画が自分にとって「何かものになるぞ」と感じました。なぜなら、私が専攻している経済学においては、まさにロビンソン・クルーソーの人間類型(経済人)が前提されており、これなくしては現在のように精緻化された理論体系は成り立ち得ないのです。経済人

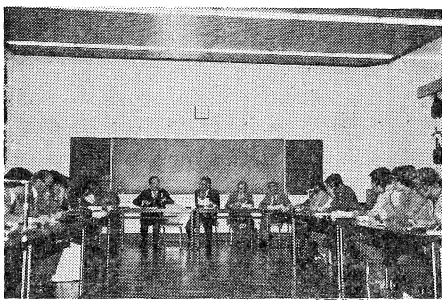
セクション演習三日間の生活を通じて体得したことは、「学問における徹底的な討論姿勢」でした。どうも日本の学問的雰囲気は、そのムラの風土を反映してか「まあまあ主義、タコつぱの排他

△館長宛の書簡より△

佐藤 聖

私はCセクションで松浦先生にお世話になりました。大学にはじめて(現在2年なのですが)はじめて、学問とはどんなものかという一端に触れることができました。いままで大学で講義を聞いていても、何かもう一つ、学問に触れないという不満と不安をいだいていた私にとって、大学共同セミナーは、まさしく、かけがえのない時間でした。昨夕、さつ

そく丸善で三冊の専門書を購入してまいりました。今度お会いするときは、少しでも学問的にも、人間的にも、まじめ人間になつていようと念願しております。また、八王子の丘で出会った人々と、ずっと、つきあっていきたいと思っております。これからも、よろしく御指導下さい。職員の皆様は、よろしくお伝え下さい。私は、大学共同セミナーに学ぶ喜びをこれから大いに吹聴させていただきます。(早稲田大学政経学部2年)



夜を徹してのティーチ・イン

●ティーチ・イン

東大百年の意味を問う

これからの日本の教育と学術研究のために、東大の体質はどう変わるべきか

(52年4月22〜23日)

主義」に支配されているように感じます。しかし、このような姿勢は、「播かれた種」を温室育ちの「ひよわなもの」にしてしまうような気がしません。「徹底して討論することによって、「学問への厳しさ強さ」が生まれてくるのではないのでしょうか。今回様々な人との討論を通じてこのようなことを感じました。

しかし、ここで看過してはならないのは、いかにこのような姿勢「育て方」を体得しても、それを

務ではないだろうか。今回のティーチ・インは、このような目的で急ぎょ企画された。あわせて記念樹も大きく成長した開館十二年目の美しいキャンパスに、いわば「わが党の士」をお招きして、ささやかなもてなしをしたい、という館長の願いもあって、大学教員懇談会参加者、大学共同セミナー指導教授と参加学生、千人会員の中の大学関係者の方々を招いた。開館以来初めて試みたティーチ・インであった。

創立百年を迎えた東大は、マスコミに大きく扱われ、時の話題となった。それは、その存在が大きく

く、影響する範囲もまた広いからであろう。

しかし、問題を余りに時の話題としてとらえると、現実とかけ離れた虚像が生まれる。東大百年の歴史は、日本の近代教育百年の歩みでもある。日本の大学が新しい方向を決めるために、東大百年の功罪を問うことは十分意味のあることであろう。その功罪の相互作用の中で正しく理解された真実だけが、浮き彫りされた東大の実像であろう。

大学人に課せられた今日の責務を果たすためには、具体的、基本的な討論を行い、実践のよすがとする契機をつくるのが目下の急

学生の大半が徹夜組となり、個人の体験を語り合ったりして交友を深めたが、先生方も二時までは正規のプログラムに参加され、春の夜の「サロン」を楽しまれた。
【出席者】(敬称略)
前田護郎、並木美喜雄、村井実、尾形憲、久保亮五、中山茂、佐々木毅、示村悦二郎、川村亮、佐々明、清水良三、大川信明、大谷瑞郎、一ノ瀬智司
【学生】東大、筑波大(各3)、埼玉大、早大、ICU、法大(各2)、千葉大、電通大、東工大、慶大、津田塾大、玉川大、中大(各1)



NHKラジオ第1放送
人生読本
5月5・7日

新しい友情

館長 飯田宗一郎

◆第1日

「目に青葉山ほととぎす初がつお」。まさに風薫る5月です。セミナー・ハウスの丘も新緑です。そして、この新緑をさらに美しくしているのは学生達の生き生きとした青春の姿です。4月、5月は、新しく大学にはいられた学生諸君のために各大学がオリエンテーションを行っているようです。そういう光景の中で朝、丘の向うの方から学生の「おはようございます」という元気な声が伝わってまいります。食堂でも学生達がコックさんやサーブのおばさん達に「おはようございます」という挨拶をしておられますし、「おはよう」という挨拶を交しながら食卓が始まるようでもあります。このようにしてセミナー・ハウスの生活は、まずお互いの挨拶から始まります。そしてその挨拶が人と人との間をなごやかにいたしますから、閉鎖的な空気が破られて、小さいながらもこのセミナーの丘は、開かれた共同社会、言ってみればコミュニティが作られていくわけ

現代は、よく断絶の時代と言われます。家庭の中では親子の断絶が、職場では上の者と下の者との断絶があります。その断絶を埋める最も手取り早い方法で、しかもすぐ実行できるのはお互いに挨拶を交すことだろうと思います。私は大学セミナー・ハウスの中で、学生達と先生達が交流する生活の実情を見ながら、言葉をかけるといふことがどんなに重要なことであるかということをもいつも痛感いたしております。

私は最近大変うれいしい感想をこの春に卒業した学生からいただきました。彼は新聞社に就職したのでありますが、学生時代にしばしば私共の大学セミナー・ハウスに來られたようです。そして積極的に自分の大学の外に学習の範囲を広めたわけでもありません。そして卒業の合宿にも三回利用したり、あるいは毎年夏行われる日米学生会議にも出席されたり、また全国の学生を集めて行く共同セミナーなどにも出席したのであります。その学生は国立大学の学生でありましたが、しかしこの共同セミナーに参加して私立大学の中にも友人を

つくり、そして今に至っても友情を持ち続けておられるようであります。

このように友人というものは、ただ与えられるものではなくして、自ら積極的に求めるものである。という考えを私は強調したいと思います。私はよく食堂で学生達と食事を共にいたしますが、そのときに「同じ釜の飯を食べる」といふことが若い学生達相互の間に、あるいは教師と学生との間に人間関係を豊かにしていることを見るのが出来ます。そういうことを見るにつけても、教師と学生、あるいは学生と学生が共に学び共に教えられ、いわゆる寝食を共にしながら、切磋琢磨することがどんなに必要であるかということも痛感いたします。

青春は感動的な時代でありますから、このような生活体験を通じて真の友人を発見することが出来れば、そこから生まれた新しい友情は驚くべきことをいたします。たとえ私はこういう実例を挙げることが出来ません。この共同セミナーに出席した学生の中である三人のグループがおりますが、三人とも違った大学の学生であります。二人は会社と銀行に勤め、一人は大学院に進学いたしました。

私は中学時代の終りに、キリスト教の教会に出入りするようになりまして。茨城県の片田舎の町であります。そこにビンフォードというクエーカー派の宣教師がおりました。私の中学生の頃は、有名な新渡戸稲造博士の晩年の頃でありました。私はそういう人たちと接しながら、あるいはそういう信仰者のことばと生活を見たり聞

す。私はその二人の学生の友人を思う心に非常に感心いたしました。私は友情というものは、このように自ら求めてつくるものであって、近頃よくいわれるようにどんなに科学技術が発達しても、友達をつくるということ、あるいは友情をつくるということは何といっても手作りでなければ出来ないことであります。

私は友人をつくり、そして友情を育てる努力をいたしておりますが、そのために私はいつも手紙を、あるいはハガキを書くことに努めております。たとえば大学セミナー・ハウスを応援して下さる個人を会員としている千人会という維持後援会がありますが、いま会員が一、三〇〇人になっております。私はそういう善意の協力に對して、いつも誕生日を覚えていてお祝いのカードを送り、友情を深めることにしております。そしてまた会費をいただいた時には感謝の気持ちをこめて、たよりに書くようなつもりで手書きの領収書を差し上げることになっております。そういうところの交流があつて、この丘をみなさんが「友情の丘」と呼んで下さるようになりました。

◆第2日

私は中学時代の終りに、キリスト教の教会に出入りするようになりまして。茨城県の片田舎の町であります。そこにビンフォードというクエーカー派の宣教師がおりました。私の中学生の頃は、有名な新渡戸稲造博士の晩年の頃でありました。私はそういう人たちと接しながら、あるいはそういう信仰者のことばと生活を見たり聞いたりしながら、人間は神の前に平等であるとか、人間は、皆兄弟であるとかいうような考えがいつのまにか植えつけられたようでもあります。大学セミナー・ハウスは昭和40年7月に多摩の丘の上に開館いたしました。経営の上にも、あるいは食堂なり講堂なりセミナー室での生活形式の中にも平等主義と民主主義とを基本において、素直に礼儀が守られるような態度が生まれるように考えました。

そのようにしていつのまにかセミナー・ハウス方式といわれるような学習様式や式典様式が生まれました。たとえば開館式とか落成式の時などには、随分偉い方々がこられるわけですが、偉い方として尊敬はいたしますけれども、格別な取り扱いはいたしません。もちろん大きなバラのリボンなどを胸につけるようなこともいたしません。しかしながら私共は、尊敬をもつて迎えます。したがって、セミナー室や食堂に入れば上も下もなく皆同じだという雰囲気がかもし出されます。つまり先生と学生との間に何らの差別もなく、何の違いもありません。また日本の学生も、東南アジアの学生も、アメリカ、オーストラリアの学生も皆平等に振舞うようになっています。したがってそのような光景に接して外部からこられた方が描くセミナー・ハウスのイメージは、人間は平等であるということでもあります。私はこの方針は間違っていないかと思

「世の中に同じ木の葉は二枚と存在しない」と言った英国の風景

画家がいます。シベリヤに降り積る雪の中にもどれ一つとして同じ結晶はないということ。人間もまた誰一人として他の一人と同じではありません。同じ二人は絶対にならないということ。しかし人間は平等であります。そのところをわれわれは十分心得なければならぬと思います。そして平等であるが違っているということを考えてときに、その異なったものとの間をそのままにしておきますと、そこに差別とか断絶とかいうものが生まれます。そこで私共はどうしても異なったものとの間に橋をかける必要があるわけです。ここでは大学に関することだけを申し上げますが、日本の大学は、よくいわれるようにマスプロ教育にあえております。教師と学生との間には断絶があり、相互に不信があり、いつてみれば人間関係にギャップがあります。そのようなギャップに橋をかけることがなければ、世代の断絶を埋めることは出来ないわけです。私はそのような役割をするのがこのセミナー・ハウスではないかと思っております。このセミナー・ハウスの中にはジェネレーション・ギャップといわれているようなものは少しも見当りません。このことによつて共に学ぶ、共に食事をすると共同の生活がどんなに大切であるかということ。私共は痛切に知ることが出来ます。

もう一つ、日本の大学には国立大学とか私立大学とかいう学校差がありますが、大学セミナー・ハウスが国立と私立のかけ橋となっていることもまた事実です。ここでは私立大学と国立大学の先生と

学生が共にセミナーをすることによつて、教授達の間、また学生達の間、大学を越えて友人になつたという例は枚挙にいとまがないと思ふほどたくさんにありません。またもう一つ大事なことは、現代のように学問が非常に分化してまいりますと、その学問を総合することが必要であります。大学セミナー・ハウスのような環境では物理の先生と経済学の先生、歴史の先生と英文学の先生、哲学の先生と数学の先生などが、つまり全く異なつた分野の人達が話し合つておられます。それは実に驚嘆すべき事実ではないかと思ふます。たとえ「ロビンソン・クルソー」と現代」というようなテーマを一つ考えても、それは英文学者の問題であると同時に、経済学者や歴史学者が考えることの出来る問題でもあります。ロビンソン・クルソーの人間像、またそれを書いた作者の人間観が経済学者と英文学者とは大変違うわけであります。しかしながらその間には人間が生きている共同の問題がありますから、それをここで一緒に考えるという事は非常に大事なことでではないかと思ふます。現代のように学問が分化し、人間が孤独化しているとき、大学のサロンとなつて居る大学セミナー・ハウスの役割というものを、一度考えます。よいのではないかと思ふます。

●第3日

ドイツの諺に「友情はしばしば灌漑を要する植物である」というのがあります。友情を永続させる

ためには、しばしば愛情を注がねばならないという意味であろうと思ふます。私共の大学セミナー・ハウスでは全国の大学から学生を集めて年一〇回共同セミナーというものをいたしますが、そこで友人となつた学生達が卒業後も続いて勉強しているグループがいくつもあります。ある教授のゼミナールは、十周年を記念して集まりましたというようにも聞きまです。さて、植物の種を蒔けば芽が出ることはどなたも知つて居ることですが、しかし実際に種を蒔いても必ず芽が出るとは限らないのです。日光が必要で、温度も必要で、水分もなければ芽は出ません。また、万一カラスが飛んで来て種を食べてしまつたらもうそれで終りです。このように考えてくると、蒔いた種が芽を出すためには実は多くの条件が必要であるということがあるかと思います。私共は、学生と先生がここでどうしたらその出会いを可能にして、さらにその出会いを新しい友情に発展させるかということに工夫をこらしております。そのため、ここに一つ釜の飯を食べるといふ共同の生活があり、共同の学習があるわけであります。

ここで大変個人的なお話として恐縮ですが、私は人生において出会いといふものがどんなに貴重なものであるか、そしてどうして生まれるものであるか、そしてその出会いの中から生まれた友情といふものをどうして継続させることが出来るか、そういうことについて少し話してみたいと思ふま

す。そのことは大学セミナー・ハウスがどうして創立されたか、その経緯を理解していただくこともなると思ふます。私は五〇歳まで自分の職業を私立大学の中で終始いたしました。初めは同志社女子大学に、それから東京女子大学に勤めました。そんなわけです。三〇代の中頃に当時の日本女子大学の学長であつた上代たの先生と出会いました。もちろん女子大学という共通の場でもありましたが、また同じキリスト教のクワイヤー派の信者であるという関係があつたからであります。そして四〇代の半ばに早稲田大学総長大浜信泉先生に出会いました。これも同じように私立大学という共通の場があつたからであります。そして五〇代に近づいた頃に東大総長茅誠司先生、それから三井銀行会長佐藤喜一郎氏に出会いました。これも私の社会生活が年と共に広がつたからであります。その人の運命といふものは、人生の途中で決定的なものに出会うかによつて決定するものでも過言ではないと思ふます。

何事も経験から出発するものです。私の場合、経験といへば大学教育ということになります。私の見る限り、当時の、今もそうでありますが、日本の大学はマスプロ教育の弊害に陥つていました。また日本の大学は、大学と大学との間に垣根があつて、相互に交流することを大変困難にしておりました。そこで日本における松下村塾のような学塾と大学発祥当時のヨーロッパ流の学舎とを合わせたような研究修練の合宿の場所を私は

私なりに考えました。もちろんそのような夢が簡単に実現するわけでもありません。日本の社会ではせつなくよい意見や考えがあつても、実践に結びつけてゆくという社会的慣習が育つていません。これは大変不幸なことだと思ふます。意見がただ意見として流れてしまふ場合が非常に多いのです。そして多くの場合に失望を経験するので。大学セミナー・ハウスは、よく「無から有が生じた」と言われますが、それは今申し上げましたように茅誠司、大浜信泉、佐藤喜一郎、上代たのというような先輩の諸先生と私が人生において出会い、われわれ五人の間で共感が生まれ、友情が育ち、お互いに日本の大学をよくしようという連帯意識が協力の実をあげたのであります。どのような立派な考えがあつてもそれを実践に結びつけてゆくためには、実はそのような協力が必要であるということがこれでおわかりいただけたと思ふます。そして何より大切なことは、立場を異にする人々や、大学の外側の人々が大学教育を理解して下さるといふことでもあります。そういう点で私は、財界人の佐藤喜一郎氏がわれわれの仲間にはいつて下さつて、資金集めにご尽力いただいたことをまたない幸運と思つております。

人間にはいざという時に駆け込む木蔭が必要であります。われわれはいつも高いものを仰ぎ求めながら、木蔭となるべき友情をばぐくみ、育ててゆきたいものだと思ふます。

●事業部だより

本号から従来の「業務通信」が「事業部だより」と改題したのは、52年度から業務課というこれまでの守備範囲を拡充強化し、新分野を開拓する任務を帯びた事業部に改称されたからである。

面目を一新して、より一層、セミナー・ハウスをご利用いただくための情報を皆様へ提供したい。利用者の皆様からのご希望、ご忠言なども、是非おきかせ願います。事業部だよりが、利用者の皆様と事業部スタッフを結ぶ意見交換の広場となってくれることを望んでいます。(事業部長 海老沢義徳)

◆新年度第一日目は

満員の盛況でスタート
4月1日の利用者は一グループ、二三人である。うれしいスタートである。春休みを利用しての各大学のゼミ合宿がつづいてる。

若葉から青葉へのシーズンは、例年のように各大学の新生入生オリエンテーション合宿を迎え、この丘はみずみずしい若人で溢れる。学部・学科単位の大学としての利用のほか、ゼミやサークルごとの新生歓迎の集会も少なくない。4、5両月についていえば、前者が二〇、後者は一〇で、計三〇件

(うち全館使用六件)、参加した教師の数は二三三人、学生数は二、五〇九人を数える。これを宿泊延人数にするると合計三、三六二にもおよび、この二ヵ月間の総延人数の三〇％に当たることになる。

聖路加看護大のオリエンテーション・セミナー(七一名)は、今春の皮切りで、4月4～6日に行われた。入学式に先だつて行われたのが特色である。

東京医科歯科大は一八〇人の新生入生が学長、各学部長はじめ二五人の教授陣とともに参加した。七つの宿舍村に分かれた各班には、いずれも同大学卒の若手OB二名(基礎・臨床両医学系から各一)ずつを助言者として配し、親しい話し合いを通してのガイダンスが行われた。

東大教養学部のオリエンテーション(二五〇人)は、同学部内各自治団体の代表者で構成されたオリエンテーション委員会が企画・運営したもので、教師の参加は全くなく、五つのクラスがそれぞれ数名の二年生を中心に、極めて自主的な合宿を行った。

「日本女性史」という特定の研究テーマをかかげてオリエンテーション・セミナーを行ったのは文京女子短大(四九八人)で今年で八回目になる。

この丘での生活体験は入学間もない新生にとつて新鮮で強い印象を残したようだ。新生入生が宿舎に残していったメモ書きには次の

ようなものがある——「このゼミのことは一生の思い出となると思います。ありがとうございませう。清掃してくださるおばさんへ。とても気持ちよく使わせていただきました。後の清掃ほんとうにくらう様です。よろしくお願ひし

◆交歓風景いろいろ

1 交歓会

4月6日夕食交歓会に九グループ一五一名。見田宗介東大助教授スピーチ。東大大学院・李時載君の韓国の歌、明大機械工学科有志の製作になるマイクソロ・コンピュータの奏でる音楽など。

5月14日第90回共同セミナーを含む九グループ(三二大学)一九五名が夕食時に交歓。共同セミナー指導の高橋潤二郎慶大教授がスピーチ。

5月28日夕食時に第91回共同セミナーを含む五グループ(三二大学)一九八名が参加。山岸健慶大教授が共同セミナーを紹介。当日誕生日を迎えた学生には絵葉書セットの贈物。

2 館長の朝食テーブル

飯田館長は4月から食堂の窓側に朝食の席を設け、よく利用されるゼミの教授方やご縁の深い千人会員の先生方が利用されたときには、朝食に招くことをはじめた。さわやかな空気のただよう朝の食堂での簡素なメニューが豪華に見えるのも主客の会話が雰囲気をつ

ます。「追伸、お料理たいへんおいしかったです」。

利用状況を数字で示せば、4月が四、二〇八人(利用率五八％)、5月が四、八二四人(利用率六五％)である。(業務主任 精引二郎)

くるからであろう。

チーフの小沼君が心をくばってメニューを考えてくれるし、フロントの女性も折を見ては接待に出かけるので、この朝食招待は好評である。

4・5月には、左記の教授方とグループが朝食に招かれた。

村上陽一郎東大助教、師岡孝次東海大教授、石原忠男中央大教授、北野弘久日大教授、学習院大

シエクスピア劇研究会学生一九名、計測自動制御学会参加者早大示村悦二郎教授外一九名、第90・91回共同セミナー指導教授。

3 八王子の「市の木」
いちよう五〇〇本贈らる

八王子西ロータリークラブから4月10日の早朝、本館前広場で八王子西ロータリークラブ会長高橋誠氏から、いちよう五〇〇本の贈呈をうけた。飯田館長はこの丘に八王子の市木「いちよう」が植えられ、他日成長繁茂し、構内に美しいいちようの並木路ができ、またいちようの森ができて、いちようの丘となるであろうと、感謝の挨拶をした。

なおこの贈呈式には、八王子西クラブが主催した、地元の青少年活動の中核的リーダー九〇名のセミナー参加者が出席した。

4 遠来荘の茶席に国連大学の学

者達を招く

その名の如く、朋あり遠方より来るといふ光景である。国連大学の研究プロジェクトが開始されたため、日本を去る前の時間を利用して、その研究班の中に当ハウスと関係の深い学者がおられる場合は、よく訪れるので、館長はその都度遠来荘に茶席を設けている。

5月中の引率者は都立大学の矢沢大二教授と東大の小堀巖教授の二組であったが、いずれも国連大学の天然資源の利用管理に関する専門家会議に参加した各国の学者達であった。



と馳走に話もはずんで……

遠来庄多摩の丘になごむ

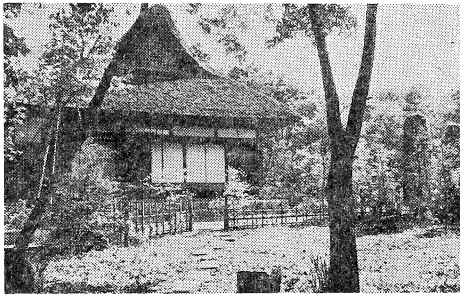
民家にふさわしい庭園完成

茶室を大学茶道部に開放

かやぶきの民家、遠来荘も三年たつて、セミナー・ハウス全体の中に、すっかりとけ込んできた。

遠来荘に茶室をつくったときから、この民家と雑木林の裏山と周辺の丘に調和した庭をつくる計画があった。5・6月にかけて、造園を行い、つくばいのある植込み、池に通じる飛び石、竹垣などが人の目をたのしませ、心のやすらぎを感じさせる。雑木林の丘にかかえられている池は、人工とは思われないほどである。

セミナーにこられた人が、勉強の合い間には、一度は訪れてみたくなる憩いの場所となるであろう。近代的な建物の多い当ハウスのキャンパスの中で、ただ一つ、



雑木林より遠来荘庭園と茶室を望む

おだやかな里の匂いをいまに残す民家、遠来荘は、形式ばらない雰囲気をかもし出す出会いの場であり、交流の場となるであろう。

遠来荘を利用していただくためにパンフレットができています。各大学の茶道部に茶室を解放したい方針で紹介したところ、二五大学から六三部の回答があった。茶道部、茶道同好会、茶道クラブなどに便宜を提供したい。

一方では、茶道教室を設け、毎月一回第四日曜に開くことにしました。ゼミの帰りに立ち寄って、休憩しながら、茶の点前を習うというのは願ってもない機会である。

鮎川宗藤門下のご奉仕で、遠来荘が大学茶道部のメッカになる日もそう遠くはあるまい。

遠来荘は永遠に人をもてなす客殿として、セミナー・ハウスのわき役を果たすであろう。遠来荘のさりげないたたずまいの中には、館長の「熱い想い」が宿っているからである。(館長付補佐 北沢高純)

● フロントの席から

お客さんを大切にするように、そして温く迎えるようにと、日頃館長から、きびしくいつつけられているので、フロントの四人組はサービスを信条に頑張っています。

中々中々中々中々中々

す。ご希望やおことなどご遠慮なくフロント四人の女性に申しつけて下さい。お申込み下さるときに便宜かと思しますので、スタッフの紹介をさせていただきます。

田島澄江 申込み、宿舍の割当てなどを担当し、未熟ながら生花を入れて講堂やラウンジに美しさを添え、お客さんを歓迎するころといたしています。

渡辺礼子 動線が一番長く、いまは専ら会計をしています。表千家の茶人で、紫宝庵という名がつきました。遠来荘の茶会にはよく姿を見せてお点前をします。

納富照枝 早朝八時から出勤してフロントを守っている九州育ちの新人です。宿舍のこともセミナー室のことも承知して申込みを受けています。

秋山美恵子 新米ですが、未熟者ではありません。サービスピッチも十分で、マイカー族らしく行動力もありますから、タクシーなどを呼ぶ前に、この人がいることを思い出して頼まれるとよいです。

その他に、館長の車とお客さん

送迎のマイクロバスの運転手村彰次がいます。館長が募金など公用で外出するときにあり、運転手不在の場合は、お客さんに不便をかけることもあります。万策つきたときは、お客さん用のマイクロを総務部の清水義久が運転してくれます。

長老の北沢高純は総務係です。看板、掲示板、標識などに正しい書体の文字があればこの書家が書いたものです。遠来荘の番頭を館長から命ぜられて、茶室の世話をしたり、月一回の茶道教室の係でもあります。

次に私共のスタッフではありませんが、食堂のチーフとして、4月から小沼省一郎さんがこられ、メニューも新しくなり、ご馳走がよくなったという大変よい噂をきくようになりました。フロントの無理もよくなり、くれますから、特別な食事がほしい時、またコンパをされる時には、どうぞご用命下さい。(フロント主任 田島澄江)

● 「ロビンソン・クルーソーと現代」リユニオン・セミナー

期日 昭和52年9月24～25日

国際基督教大学教授 大塚久雄氏

● 第93回大学共同セミナー

期日 昭和52年10月7～9日

筑波大学教授 村松 剛氏

平岡敏夫の五氏。運営委員・青木生子氏

● 全体講義

《セクション指導》西郷信綱、木村正中、麻原美子、松田修、

◆ 遠来荘に

茶道教室を開く

毎月第四日曜、午後1～5時

▽指導 松月会鮎川宗藤門下
▽会費 Ⅱ学生・職員 500円
社会人(外部の志) 1,000円

▽内容 抹茶を主に煎茶も
松月会の流派は表千家

《参加の方法》

1 セミナー・ハウスに来られたご縁が、茶道を学ぼうかけになることが望ましい。

2 千人会員が家族の方と半日をセミナーの丘で過ぎられ、昼食後に茶室に寄られ、茶道を学んで帰るのがよい。

3 多摩地方に住んでいる教授学生、千人会員の中でお茶のすきな方々が、この自然の中の茶室でお点前をなさるために来るのがよい。

4 教室ですから、何人かは続いて出席し、勉強をする生徒ができることを師匠は大いに望んでいる。

5 ころとことば——そこに人間がある。茶の心は、おもいやりですから、セミナー・ハウスが、いつまでも健在であることを祈りながら遠来荘を訪ねられよ。

立教大学教授	久保田 順	一橋大学教授	良知 力	東京学芸大学生物科新入生オリエンテーション	玉川大学助教授	彦由 一太
東京大学助教授	井手 久登	電気通信大学教授	山中惣之助	立正大学教授	立正大学教授	杉澤 新一
駒沢大学新入生歓迎合宿		東京大学講師	田中三千夫	早稲田大学教授	一橋大学・津田塾大学歴史科学研究会	
東洋大学ギターアンサンブル	松縄 勉	成蹊大学助教授	徳谷 昌勇	芝浦工業大学教授	シヤロームICYEリユニオン	
工学院大学学生自治会活動ゼミ		明治学院大学教授	竹内 真一	青山学院大学助教授	第90回大学共同セミナー	
法政大学助教授	広田 明	東京経済大学助教授	廣井 敏男	東京外国語大学教授	第91回大学共同セミナー	
東京学芸大学教授	安良岡康作	早稲田大学助教授	守永 誠治	東洋大学教授	電気学会放電セミナー	
慶心義塾大学教授	小茂島和生	早稲田大学助教授*	島田 征夫	東京学芸大学教授	計測自動制御学会	
立教大学講師	小林 晃	東洋大学助教授	松本 恒之	東京学芸大学助教授	国立療養所東京病院・武蔵療養所	
東京教育大学教授	吉本 市	東京経済大学教授	富塚文太郎	東京学芸大学助教授	附属看護学校	
東京学芸大学理科(物理・化学・理数)新入生オリエンテーション		東京都立大学教授	半谷 高久	早稲田大学教授	堀之内キリスト教会	
工学院大学助教授	須田精二郎	上智大学教授	ホセ・ヨシバルト	産業能率短大助教授	高座教会学生会	
早稲田大学講師	木村 裕	日本女子大学家政経済学科新入生オリエンテーション	憲美	和光大学講師	国際ロータリー第三五八地区青年リーダー・セミナー	
明治大学教授	高木 亀一	早稲田大学助教授	岡沢 憲美	東京都立立川短期大学新入生オリエンテーション	図書館問題研究会	
成蹊大学教授	佐々木克己	早稲田大学助教授	常田 稔	都立工科短期大学機械工学科新入生オリエンテーション	住宅問題研究会	
学習院大学教授	児玉 久雄	早稲田大学教授	鈴木 慎一	明治大学短期大教授	三井精機工業	
明治大学教授	藤芳 誠一	工学院大学教授	波多江健郎	文教大学女子短期大学部新入生オリエンテーション	西武百貨店*	
法政大学教授	高橋 誠	立教大学教授	野々口格三	文京女子短期大学英語英文学科新入生セミナー*	日本ゼオン	
芝浦工業大学講師	藤沢 好一	東京工業大学助手	布施 徹志	入生セミナー*	【個人利用】	
東京薬科大学教授	河野 恵	明治大学教授	築地 整	青山学院大学教授	サンワ事務所	
神奈川大学教授	宮川 武雄	青山学院大学助教授	笹森 健	成蹊大学助教授	稲村 栄典	
中央大学講師*	木下 徳明				大谷登志雄	

編集後記

小池滋先生の風刺のきいた巻頭のメッセージが、本紙の性格に新鮮味を加えて下さったようです。ダニエル・デフォーを現代人の前に連れ出したところが、セミナー・ハウスのイメージになんとなく合致するように思われ、巻頭に飾らせていただきました。

本号より「業務通信」を「事業部だより」と改題します。紙面は事業部職員のオン・パレードとなりましたが、新年度よりスタートした二部一室制により、サービス活動の中心部門を担う事業部の心意気を紹介しました。(能)

事典 現代のフランス

各紙絶賛!!

■朝日新聞 領土、地形、気候にはじまりレストランのメニューや住居賃貸借契約書が盛りこまれるなど、読んでも楽しい「フランス百科事典」。

■毎日新聞 地図、写真、統計もふんだんで、読む事典としての魅力があふれている。動・植物図鑑、勲章、などもおさめられ便利で楽しい。

■読売新聞 料理、酒、観光にまで触れており、地図、図版、写真も加えて、専門家や学生、ビジネスマンばかりでなく一般の読み物としても面白い。

A 5判・640頁
定価 6,500円

編集 新倉俊一 弥永康夫
朝比奈諒 鈴木康司
石井晴一 富永明夫
稲生 永

フランス 文学講座 全6巻

5思想 ■第二回配本 福井芳男他編

中世文化の開花から現代思想の在処まで、文学を生み出す知的土壌の変革と系譜をたどる。三、六〇〇円

大修館書店

101東京都千代田区神田錦町3-24